

絹谷幸二賞

若手画家を応援し、具象絵画の可能性を開くことをめざした第1回絹谷幸二賞(毎日新聞社主催、三井物産協賛)の受賞者は神奈川県相模原市の画家、福永大介さん▽奨励賞は名古屋市の愛知県立芸術大学大学院生、坂本夏子さんに決まった。贈呈式は17日、東京都千代田区の学士会館で開かれる。【岸桂子】

神奈川県相模原市、画家

福永大介さん

ドラム缶に入った掃除機、モップ、看板裏の焼却炉、月、東京都江東区の小山、鉄条網の向こうに見える登美夫ギャラリーで開く資材置き場。画面からどこか不穏な空気が漂う。一方で、大画面に油絵の具で描かれたモップは人間の顔みたく、ユ

発散するモノ

「都会ではなく、のどかな自然が広がる田舎でもない。どこか見たよ

うな、ローカルで人工的

な景色」に溶け込む何でもない「モノ」。そんなものを描きたいという。力強いタッチと強烈な色彩はドイツ表現主義の絵画を連想させるが、溶け

た個展の作品群が評価された。

出すコインや骨の折れた傘を配したところが現代的だろうか。現実の光景と幻想の世界がうまく組み合わされている。「モップや看板そのものを描きたいのではなく、モノを絵にした。人間を描くより、自由にイメージを重ねられます。ドロ잉ングを繰り返してイメージを絞る。

「具体的なものを描いても、絵は「ワン」をつけるのが面白い」。ひょうひょうとした語り口で自身がめざす絵の魅力を説いてくれた。



ふくなが・だいすけ 1981年、東京都生まれ。多摩美術大学卒。06年に村上隆さんが主宰するアーティスト発掘展「GEISAI#9」で小山登美夫ギャラリースカウト賞。＝丸山博撮影



「Overflow」2008年、218.2×291.0センチ

奨励賞

名古屋市長、愛知県立芸術大学大学院生

坂本夏子さん

昨年秋の初個展での受賞。「思いがけず、本当にうれしい」と満面の笑みをみせる。名古屋市のギャラリー「白土舎」に並べたのは、新作「Overflow」をはじめとする

非現実的世界 大胆に

で訪れた人の度肝を抜いた。熊本県立第二高校美術科から大学へ進学。2人が選ばれたことは素晴らしい。選考委員の方々にも感謝します。この時代に絵を描き続けることは困難が伴いますが、絵画は、触先(ハざき)となって新しい時代を切り開く役割を担っています。絹谷幸二賞が絵を描く若い人たちの励みになればうれしいです。



「tough guys」2008年、259×194センチ

絹谷幸二さんからのメッセージ



福永さん、坂本さん、おめでとうございます。絵画は、他の誰とも違う表現を獲得してこそ優れた作品となります。記念すべき第1回で独創的な

対象は27人に 推薦を依頼した38人のうち、28人から回答があった。1人重複しており、27人を選考の対象にした。27人は24〜35歳。日本画や洋画、ペン画など、ジャンルは多岐にわたった。



さかもと・なつこ 1983年、熊本市生まれ。4月から愛知県立芸術大学大学院博士課程後期へ進む。＝大竹慎之撮影

曖昧な世界塗り上げ

本江邦夫さん (美術評論家・多摩美術大学教授)

美術とりわけ二次元に固執する絵画表現には、それが優れたものであればあるほど、時代や社会の本質を映し出す鏡のようなところがあります。暗く複雑怪奇な世相を反映してか、福永さんも坂本さんも、おのずから出口無しの曖昧な世界をきっちり塗り上げています。

選評

事物を見る中に輝き

中井康之さん (国立国際美術館主任研究員)

近年、ある種の傾向を伴いながらも具象的絵画作品が世評をにぎわしている。その中で絹谷幸二賞は、より本質的な絵画を求めて創設された。何が本質なのか、という問いに対する解は受賞作家の作品に求められるのだろう。果たして、福永大介の作品は、その問いに耐えうるものかを懐胎していると我々は判断したのである。近代的な精神は事物を分析的に解読し、絵画もそれに則った。近年の傾向はそれに抗うような動きであったが、福永の作品は事物を事物として見る中に新たな輝きを導き出した。

色に対し独自の感度

福田美蘭さん (画家)

具象絵画とは「現在しか表現できない、今という時代を呼吸している絵だ」と考えている。受賞した2人は、身体性を足がかりにしつつこの点を十分に發揮していた。福永作品は、思い切りの良さがあつた。色に対する独自の感度、使いつらう色も興味のある対象物とうまくかみ合わせていた。絵画という表現にこだわっている人が受賞したのは何よりだ。

候補者からポートフォリオ(経歴や作品写真等をまとめたファイル)を送ってほしい、事務局が選考委員3氏に郵送。選考委員は全冊を精査し、必要に応じて候補者の展覧会やアトリエなどを訪れて作品を観察し、2次選考前にも実施した。1次選考は、表現力に

選考過程 について盛んに議論を重ねながら、3回の投票で徐々に絞り込んだ。榎木、上條、坂本、田中、福永、松本尚の6氏が2次選考に進んだ。2次選考では、新設賞にふさわしい斬新さを持つているか、具象絵画の可能性を追求しているか、などを議論。榎木、坂本、福永の3氏を最終候補に残した。

推薦された人たちは 池田学、池田光弘、岩田壮平、薄久保香、小笠原美穂、小畑祐也、榎木知子、上條花梨、小池真奈美、小松孝英、坂本夏子、下出和美、舛次崇(たけよし)、田中麻紀子、遠山裕崇、中村協子、西川芳孝、笹田亜希、福永大介、松本尚、松本三和、mariane(マリアーノ)、山下春菜、山本太郎、山本電基(1人は本人の希望で名前を掲載しません) 石川健次、江上ゆか、岡村多佳夫、尾崎信一郎、加藤英夫、鎌田享岸、桂子、栗原俊雄、黒田雷爾、後藤耕二、三田晴夫、高階秀爾、鷹見明彦、中井康之、野地耕一郎、拜戸雅彦、林洋子、原久子、福住廉福、田中洋三、山下裕二、山口裕美、山口洋三、山下裕二、山本淳夫、和田浩一、渡辺亮一 (いずれも敬称略、50音順)